

Title	身体経験と自己意識 : 『知覚の現象学』における身体概念
Author(s)	東, 昌紀
Citation	カルテシアーナ. 13 P.51-P.71
Issue Date	1995-03-31
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/66961">https://doi.org/10.18910/66961</a>
DOI	10.18910/66961
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

# 身体経験と自己意識

——『知覚の現象学』における身体概念

東 昌 紀

私の身体は私によってどのようにして知られているのだろうか。メルロー・ポンティは「私は自分の身体の前にいるのではなく、私は自分の身体のなかにいるのであり、あるいはむしろ私は自分の身体である」(PP 175)と<sup>(1)</sup>言う。私が自分の身体であるならば、私は私の身体を経験しているはずであり、私は自分の身体と出会っているはずであろう。

「身体—主観」を主張するメルロー・ポンティにとって、私による私の身体の内経験は同時に「私による私の経験 *épreuve de moi par moi*」(PP 462)を意味するであろう。

そこでこの試論では、メルロー・ポンティが『知覚の現象学』において「私による私の身体の内経験」をどのように開示してゆくのかを検討し、それがどのように表明されるべきであるのかを考察してゆきたいと思う。したがってこの作業は必然的にメルロー・ポンティの身体概念を明らかにすることになるのである。

## 現象野の開示

51 『行動の構造』や『知覚の現象学』の序論における綿密な検討を通して、メルロー・ポンティは、対象的に構成され

た知覚が始源的な領域によって下から支えられていることを明らかにした。この始源的な領域は、分析と構成からなる  
 可知的、理念的統一体としての客観的世界ではなく、一切の経験がそこに根を下ろしているがゆえに、生きられた世界  
 としての「現象野 champ phénoménal」である。したがって「哲学の最初の行為は、対象となっている世界の手前に  
 ある生きられた世界へと立ち戻る」(PP 69) ことになければならない。

知覚を対象化するということは、たとえば生物の「運動志向 intentions motrices」を客観的な運動へと転換し、そ  
 れを神経機構によって説明するということである。そうすることによって、感覺することは諸性質の単なる受容という  
 ことになり、それらは「感情性 affectivité」や「運動性 motricité」から切り離されてしま<sup>(2)</sup>う。そこでメルロー＝ポ  
 ンティは対象へと還元される手前の、現象野における身体の検討へと向かうのである。

ところで現象野の開示とそこにおける身体のあり方の説明によって『知覚の現象学』におけるメルロー＝ポンティの  
 目的が成就したのではなかった。メルロー＝ポンティによれば「対象となっている世界の手前に生きられた世界を暴き  
 出した頭在化は、生きられた世界そのものに対しても続行され、現象野の手前に超越論的領野を暴き出す」(PP 73)  
 のである。したがって現象野における身体の検討を介して、現象野の手前にある超越論的領野への展望が開かれねばな  
 らないだろう。

### 作動しつつある志向性

ゲシュタルト理論の成果を取り入れながら、メルロー＝ポンティは知覚、特に視覚を次のように説明する。

見る者は対象への接近を〈眼差し〉という仕方で直接に知っている。これは私自身の思惟が不可疑であるのと同断で

ある。その際見る者は、己の向かっている対象に眼差しを開き、他方でその対象の周辺部には眼差しを閉ざすのである。つまり見る者は対象をより良く見るために周りのものを眠らせる。<sup>(3)</sup>「対象を眼差すことはそこに身を沈めることであり、またある対象が現れるとき、他の対象を隠さずにはおかないような系を諸対象は形成しているのである」(PP 82)。

ところで見る者は己の眼差しを自由に動かすことができる。今度はほんのさっきまで見えていたものが、今見えているものによって隠され周辺部に移される。いわば「眼差される対象は自己を生気づけ、開花し (se deployer)、他の対象は周辺部へと遠のく」(PP 82) のである。一つの対象が「自己を見せる se montrer」とときには必ず他の対象は隠されるのである。<sup>(4)</sup>

見る者の眼差しが閉ざされている周辺部の諸対象の方はどうであろうか。眼差された対象によってそれらは隠されている。しかし隠されたそれら周辺部の対象はそこにあることを止めるわけではなく、見る者に対して己を開いているのである。このような事態はどう理解されるだろうか。「ある対象を眼差すことはそこに住まうようになることであり、そこから他の一切の対象をそれらがこの対象に向けている面にしたがって捉えることである」(PP 82)。このように理解された「対象—地平」という構造、すなわち「展望 Perspective」は地平における対象相互間の隠蔽関係を表すものなのである。

ところでこの展望において見る者はどこに位置するのであるうか。見る者は、眼差すことによって、地平に共存する諸対象のただ中に一挙に身を置くと考えねばなるまい。<sup>(5)</sup>見る者は〈図〉として開花する対象を見るというよりも、むしろ眼差された対象から〈地〉となって共存する諸対象を見るのである。

以上のようなメルロー＝ポンティの特異な知覚の議論は、時間的な展望についても敷衍されてゆく。眼差されていた

対象は眼差しの動きによって遠のく。といっても見えなくなるわけではなく、それは現在眼差されている対象に向けられた面を見せている。同時にこの眼差されている対象は次に眼差されるであろう対象が向けている面を隠している。<sup>(6)</sup> 視覚の場合と同様に時間の展望においても見る者は地平に身を置く。働いている今の眼差しは措定された過去と未来の表象を持っているのではない。この眼差しは、その働きにおいて、つまり眼差されている対象に見る者が身を置くことで、直前の過去（眼差されていた対象）と間近の未来（眼差されるであろう対象）が見る者に見せている面を捉える。すなわち見る者は直接的な過去と未来とを地平として捉えるのである。しかもこの地平は直前直後の時間に限られはしない。なぜならば「直接的過去は同じような仕方ですれに先立つ直接的過去を反響して、流れた時間は全面的に現在の中に引き留められ捉えられている。間近の未来についても同様であり、それもまた己の間近さの地平を持つだろう」(pp. 83)。

メルロー＝ポンティはフッサールの用語である「過去把持 Retention」と「未来予持 Protention」の志向性をこのように理解する。つまりこれらの志向性は、見る者と眼差された対象との関係において措定される对象的（客観的）な時間の中ではなく、見る者が一挙に身を置く地平において働いている志向性である。これらの志向性のおかげで、知覚の現在には絶えず流れ去ってゆくと考えられる事実上の現在であることをやめ、「对象的な時間の中の固定点、それと確認できる点となる」(pp. 83)のである。もちろんこの点は对象的な時間の中に措定されたものではない。この固定点は地平を捉える志向性の起点であり、对象的な時間の外に現象野を構成するのである。

メルロー＝ポンティは、対象措定の志向性と地平を捉える志向性との違いに留意して、前者を「作用の志向性 intentionnalité d'acte」あるいは「表象の志向性 intentionnalité des représentations」と呼び、後者を「作動しつつある志向性 intentionnalité opérante」あるいは「実存 existence」と呼んでいる。<sup>(7)</sup> もし見る者が眼差している対象に「

拳に身を置き、そこで作動しつつある志向性が地平を開いている、同じことだが、この志向性が地平に張り巡らされているのであるならば、身体と世界との関係が改めて問われねばならないだろう。それらの関係が解明されたときに初めて、メルロー＝ポンティの知覚論が単なる比喩ではないことも了解されるだろう。

### 現象的身体

メルロー＝ポンティは、身体が措定的な意識にとつての対象としての物体であること、つまり「対象的身体 *corps objectif*」であることを否定する。作動しつつある志向性を見いだした今、メルロー＝ポンティは身体とこの志向性との関係を問題化する。眼差す働きによって見る者が眼差される対象へと、すなわちこの対象を含み込んでいる地平へと一挙に身を置くのは、身体こそが地平に根を下ろしているからではないだろうか。そこでメルロー＝ポンティは作動しつつある志向性によって地平に根を下ろした身体を「現象的身体 *corps phénoménal*」と呼ぶ。この現象的身体が「媒体 *véhicule*」(PP 97)となり「世界内存在の運動 *mouvement de l'être au monde*」(PP 93)を遂行する。世界内存在の運動は見る者の身体の現象野への超越であり、現象的身体は現象野における軸、固定点となるのである。

ところで見る者の身体は、見る者自身にとっては一つの謎めいた存在となっている。なぜならば物の方は見えたり見えなかつたりするのに対し、見る者の身体は常に知覚されているのである。しかし身体は知覚されているからといって対象として現前するのではない。「遠ざけられ、最後には私の視野から消え失せることができるからこそ対象は対象である」のだが、身体の方は「私の一切の知覚の周辺に留まり、私と共にある」(PP 106)。己の身体は絶対的な永続性であり、それは知覚において「地 *fond*」の役を果たすのである。

一体、地平における現象的身体はどのようにして知られるのであろうか。それは作用の志向性によっては捉えられない。なぜならば作用の志向性は対象的身体を与えることはできるが、絶対的な永続性である「地」としての身体はこの志向性を越え出ているのであるから。しかしながら私は己の身体を知っていることを確信している。

ここでは、あるものが捉えられるときの、その捉えられ方が問題となってくる。措定的な「……と思う」の秩序には属さない仕方が模索されねばならない。メルロー・ポンティは、現象的身体の知られ方が措定的な思惟の秩序には属さないものであることを主張する。例えば幻影肢を感じる患者の症例において、メルロー・ポンティは幻影肢の消失が世界内存在の運動を介して進行すると考えるのであって、それは表象の作用とは無縁である。メルロー・ポンティは身体に世界へと向かう運動の力を認め、この超越の運動の力を「実存的脈動のエネルギー *énergie de la pulsation d'existence*」(PP 95)と呼ぶのである。

私の身体を私を知っているということは、私は身体の超越の運動の力を知っているということに他ならないであろう。メルロー・ポンティが言うように「私の身体が現れる際には、私の身体の不在やこの身体の変様でさえも考えられないものになっている何もものがあらねばならない」(PP 107)のである。現象的身体によってこの力が担われているのではなく、この力こそ現象的身体そのものであるのではなからうか。身体は世界内存在の運動の媒体であると同時にこの運動の力でもあろうということになるわけだが、だからといって私の身体が私によって知られていることが説明されたわけではない。力である現象的身体はどのようにして捉えられているのであろうか。

メルロー・ポンティは、古典的心理学が他の物体から自己の身体を区別する特徴として見いだした身体の「運動感覚 *sensations kinesthésiques*」の概念に注目する。これは私が私の身体とともに為す運動の独自性を表している。「私

の身体を私は直接的に動かし、それを他のところへ動かすために、私は私の身体を客観的な空間の一点に見いだしたりはしない。私は私の身体を捜す必要はない。私の身体は始めから運動の終わるところに触れており、身体自身がそこへと身を投じるのである」(PP 110)。

我々は、力である現象的身体を捉える手がかりを身体の運動感覚に求めた上で、<sup>(8)</sup>生きられた、あるいは受肉した身体の吟味に取りかかろう。だがその際問題化されるのは「現象的身体とは何か」ではなく、<sup>(9)</sup>「私に対して現象的身体が力として如何に現れるのか」である。これは私による私の身体の経験がどのようにして成立するののかという問題に帰着することになるであろう。

### 自己の身体、あるいは身体図式

例えば私は自分の手を客観的空間の中に位置付けた上で捜す必要もなく、自分の手の所在を知っている。もし手が客観の対象であったならば、それは対象化され、同時にこの対象との関係を指定する主観が想定されねばならないだろう。ところが私は自分の手がどこにあるのかを知るのに、こうした指定的意識の助けを必要としない。私の手は対象として顕在化されることなく私によって知られている。認識の対象としてではなく、私は私の手を、私の身体をどのように捉えているのであろうか。

この問いに答えるためにメルロー＝ポンティは二つの概念を導入する。一つは「身体図式 *schéma corporel*」であり、他の一つは「自己の身体 *corps propre*」である。自己の身体は、いわば内部から知られるかぎりでの私の現象的身体である。私の現象的身体は、どのように現れるのか。現象的身体の私への現れを私は如何に捉えるのか。そこに私



による私の身体の経験が存しているはずであろう。

初めにメルロー・ポンティにしたがって、身体図式の概念の変遷を見ておこう。「身体図式は、幼児期を通して、触覚的、運動感覚的及び関節に係わる諸内容が相互に連合し、あるいは視覚的内容とも結び付いて、それらをより一層容易に喚起するようになるにつれて徐々に現れる」(PP 115)と考えられていたのだが、実のところ身体図式(10)の概念は連合説の定義をはみだして用いられていた。身体図式によって理解されていた身体の空間性は部分の寄せ集めではなく、「全体から部分へと降りてくるのでなければならぬ」のであり、「身体図式が習慣的な身体感覚 *celesthesie* の残滓であるかわりにその構成法則になる」(PP 115)のでなければならぬ。そうでなければ例えばアロヒリー(10)という現象は身体図式によってはうまく理解できないのである。こうして身体図式は「私の構え *posture* についての包括的な自覚、ゲシュタルト心理学の意味での一つの〈形態〉である」(PP 116)ということになる。

身体図式が私の身体の諸部分についての包括的な意識ではないのもちろんのことであるが、右の身体図式の定義もそれだけで満足のゆくものではなかった。ゲシュタルトの定義によって示された現象が可能であるのは何故かということこそ、問われねばならないのである。この問題に答えるためにメルロー・ポンティは身体の空間性とその運動性に注目する。身体の空間性、運動性は身体とその周囲の対象との位置の関係、及びこのようにして構成された空間内での身体の移動を意味するのではなく、身体においていわば身体内部に成立する空間性であり運動性を意味している。

私は自分の手がどこにあるのか、自分の身体がどこにあるのかを、それらが外的対象と結ぶ関係(「位置の空間性 *spatialité de position*」(PP 116)において、知解するのではない。一つの形態としての私の手は顕在化されることなく、灰皿に置かれた煙草へと伸びてゆく。伸びてゆく手が私の手であることに疑いを挟む余地はない。「自己の身体は、

図と地という構造の、いつも明示されることのない、第三項である」(PP 117)。自己の身体が地と図の構造における第三項である理由を、メルロー・ポンティは、身体の空間性、運動性の分析を通して説明する。

身体の空間性、運動性を明らかにしよう。指で自分の鼻を指示するように要求されたある精神盲の患者がその行為をやり遂げることができるのは、鼻をつかむことを許された場合である。行為の途中でその動作を中止するように命令されたり、鼻に触れるための補助手段が必要とされる場合には、その行為は不可能になる。<sup>(11)</sup>したがって「身体に関してさえへつかむこと」へ触れること」は「指示することとは別のことであるのを認めなければならない。(…)つかむという動作はその目標をあらかじめ先取りするからこそ始まるのである。なぜならばつかむことを禁じるだけでその動作を抑止することになるのであるから」(PP 120)。

指示する動作に対して、つかむという動作の特権が認められる。「私の身体のある点は、つかむという予料の際、指示されるべき点としては私に与えられていなくても、つかむべき点として私に対して存在しうる」(PP 120)のである。つかむべきものとしての鼻がどこにあるのかを患者は知っているのに、どうして指示されるべきものとなるとそれがどこにあるのか彼にはわからなくなってしまうのであろうか。

ここで我々はつかむという動作においては現れるが、認識の対象となると現れないこともある身体空間の存在を認めなければならないだろう。先の患者はある具体的な動作をするように求められると、その命令を問い返すような調子で繰り返し、次に自分の身体をその課題が要求する全体的な姿勢へと置き、やっとその動作を行う。<sup>(12)</sup>健常者であれば、求められた動作を普通その動作が現れる状況から切り離して行うことができる。しかしこの患者は一つの具体的な動作をその動作が現れる状況から抽出することができない。そのために患者は、全身をこの動作に協力させ、自分の身体を課

題が要求する全体的な姿勢の中に置くことによってしか、その動作を為すことができない。例えば患者が軍隊式の敬礼を行うときには、それと一緒に敬意を表す外面的な特徴まで現れるのである。<sup>(13)</sup>

健常者においてはなかなか気付かれない身体空間の存在に、かえてこの精神盲の患者においては気付かされるのである。私の身体を私を知るためには、何も自分の身体を認識の対象とする必要はないのである。「私が熟知している諸行為を支えるものとしての腕、あらかじめその領域や有効範囲が私に知られている一定の行動の力としての身体が存在する」(PP 122)のである。

先の精神盲の患者に認められる他の特徴にも目を向けてみよう。この患者は、触れられた身体上の箇所を捜すように求められると、自分の身体全体を動かすことによって、徐々にその場所をつきとめる。また受動的に運動を被った際には、患者は運動があることを感じはするけれども、それがどんな運動か、その運動の向きはどちらかを言うことができない。この場合にも患者は能動的な運動に助けを求めにゆく。<sup>(14)</sup>患者は、触れられた部位がどこにあり、受動的な運動が何かを捉えるために自分の身体の全体的な運動を要するのである。やはり患者は「準備運動によって自分の身体を顕在的な知覚対象にしようと努める」(PP 125)のである。正常な被験者であれば準備運動を行うことなく、触れられた部位を知ることができるだろう。「健常者ではそれぞれの身体的な刺激は、顕在的な運動 *mouvement actuel* の代わりに、一種の〈潜在的な運動〉 *mouvement virtuel* を呼び起こし、求められている身体の部位は匿名の状態から脱し、それが特別な緊張によって自己を告知するのである」(PP 126)。正常な被験者においては、身体上の指示されるべき部位は「図」の状態にまで顕在化されることなく知られている。

我々は「運動の力としての身体自身によって保証された、一つの結果の子料あるいは把握、一つの〈運動企投〉 *Be-*

wegungsentwurf' 116の運動志向性 intentionnalité motrice] (PP 128) の存在を認めねばならない。この運動志向性こそ身体の構えなのである。始源的な意味において、身体空間は身体の運動志向性の場として構成される空間性であり、身体運動は、この志向性の「投射力 puissance de projection」(PP 139)の現実態としての運動性であるとなすことができる。

上に挙げた精神盲の二つの症例から、自己の身体が身体の運動志向性において予料されると誤って考えてはならない。なるほど私の身体の部位は顕在化されることなくこの運動志向性において予料されるのではあるが、メルロー・ポンテは、自己の身体が図と地の構造の、明示されることのない、第三項であると言ったのである。さらに「对象的」という言葉を厳密に取れば、身体の運動志向性において予料される身体の部位もやはり对象的に構成されている。

精神盲の患者が触覚的所与の場所の確定のために身体全体の運動を必要としていることが、注目されねばならない。患者は触れられた部位を図の状態へまで移行させるために、全身の運動に助けを求める。患者が捉えるのは、触れられた部位ではなく、むしろ触れられた部位に対する自分の運動の方である。<sup>(15)</sup> 何故患者は自分の身体の運動を求めるのであろうか。<sup>(16)</sup>

### 力としての身体

先の精神盲の患者が被っている障害は一体なんであるのか。身体のある部位が図として顕在化する際に、彼は、外面的諸対象との関係からなる位置の空間性ではなく、「状況の空間性 spatialité de situation」(PP 116)に身を置いたり、また身体の全体的な運動によってこの空間を描き出す。患者はまず最初に、図が図として顕在化するための場と

しての「身体性の地帯 zone de corporeité」(PP 119)を準備しなければならない。患者は運動を介して、運動とともに、図の顕在化を始めからやり直さねばならないのである。患者の障害は、身体の運動志向性を目覚めさせることなくしては事が始まらないという、この一点にあるように思われる。

メルロー・ポンティは、身体の運動志向性としての投射活動を意識の始源的な様態であると考える。したがって「意識は始源的には〈…と私は思う〉 je pense que ではなく、〈私はできる〉 je peux である」(PP 160)とした。「私はできる」はフッサールの用語の援用であるが、この用語は、現象的身体を力として了解するためには最適であった。世界内存在の超越の運動の力は、身体の運動志向性において現実態となっている力に他ならないのである。

ところで、なぜ精神盲の患者は身体の運動性を改めて目覚めさせることを必要とするのであろうか。それは、患者が身体の運動志向性において現実態となっている力を統覚し直さなければならないからに他ならない。もしそれが統覚されていたのであれば、患者はわざわざ身体の運動志向性を顕在化するようなことは決してしなかったであろう。患者においては現実態となっているこの力を捉えているはずの根本的な意識が欠けているのである。

我々は「私の身体は構えとして私に現れる」(PP 116)と結論することができらう。ただしその意味を正確に把握しなければならぬ。先に述べたように、身体の構えは身体の運動志向性であるのだから、身体の構えが私に現れるということは、身体の運動志向性において予料される身体のある部位についての意識によってではなく、私の構えについての包括的な自覚において成立する。つまり構えの自覚は身体の運動志向性そのものについての意識を必要とするのである。そしてこの運動志向性は力として統覚されていなければならない。この力の経験こそ、内部から見られたかぎりでの現象的身体の、すなわち自己の身体の経験である。自己の身体が地と図の構造において明示されないのは、それ

が身体の運動志向性において現実態となっている力の経験であるからに他ならない。身体図式が意味するのは、自己の身体の経験が力の経験であるということである。我々は、私による私の身体の経験が身体の運動志向性において現実態となっている力の経験であることを認めなければならないのである。

ところで、身体図式の理論にはもう一つ別のファクターが介在するのである。

「結びつけられるものについての意識は、結びつけるものと結びつけるその働きについての意識を前提とし、対象意識は自己意識を前提とする、あるいはむしろそれらは同義語である」(PP 274)とメルロー・ポンティは述べる。この定義を身体図式に適用すれば、自己意識は身体の運動志向性についての意識ということになる。後者の意識は身体の運動志向性において現実態となっている力の統覚であった。すなわち自己の身体を力として統覚することこそ自己意識なのである。私による私の身体の経験が私による私の経験でもある秘密はここに隠されている。

この問題は先送りされてしまうのであるが、我々は次にメルロー・ポンティの身体概念を別の場面において検討してゆかなければならない。これまで我々は自己の身体をいわば内部から検討し、意図的に一つの制限を加えてきた。その制限は外的空間の捨象である。しかしながら「一切の図は外的空間と身体空間の二重の地平に姿を現す」(PP 117)。外的空間との関係において、身体図式と身体の運動志向性とを我々は検討しなければならないのである。

### 自己の身体と感覚の主体

超越論的自我 Ego transcendental を想定し、感覚することを感覚するという思惟に還元し、感覚作用を一つのメカニズムにおける因果関係として捉えることに、メルロー・ポンティは徹底的に反対する。もし超越論的自我が一切の

經驗を構成する主観であったならば、我々は自分を自分の身体と同一視することなど決してできなかったであろうし、精神の洞察によって捉えているものを自分の目で見ているなどと信じることはできなかったであろう。<sup>(18)</sup>先に我々は、現象的身体が指定的な意識によって対象として構成されるのではなく、力として統覚されており、身体の運動志向性は始原的な意識の形態として「私はできる」であって「私は思う」ではないことを示したところである。感覺されるものと身体<sup>(19)</sup>の運動志向性とはどのように係わり合うのであろうか。

例えば小脳または大脳皮質の疾患の運動性障害において觀察される、感覺刺戟の筋緊張に対する影響の特徴は、腕を上げる運動が視野の色によってその範囲と方向を変えられるということである。緑の視野によって被験者の手の運動は正確であるが、赤い視野では不正確になる。外へと向かう運動は緑によって速められ、赤によって遅らされる。皮膚上の刺戟の位置は赤によって外側へと変えられる。黄と赤は重さと時間の算定の誤りを強め、青と緑はその誤りを補正する。<sup>(19)</sup>感覺は純粹な性質として捉えられているのではなく、それは「運動的相貌」(Pp. 243)とともに現れるのである。

ところで色の運動的相貌が感覺的性質としての色によって引き起こされると考えてはならない。「感覺される色の効果はそれが行動に及ぼす影響とは必ずしも正確には対応しない。例えば私がそれと気付くことなく赤色は私の反応を強化する」(Pp. 243)。視野の色は確かに私に一つの見方を促すが、この見方は純粹性質として感覺内容を対象的に措定する表象の働きとは明らかに無縁である。カンディンスキーは「緑色は我々に何も要求しないし、我々を促すこともない」と言い、ゲーテは「青色が我々の視線に屈する」とか「赤色は目に突き刺さる」と言った。<sup>(20)</sup>こうした表現が可能であり、意味を持っているとすれば、それは感覺が、即自的存在ではなく、身体<sup>(20)</sup>の運動的相貌と結び付いているからに他ならない。何故感覺は身体<sup>(20)</sup>の運動的相貌と密接に係わりあうのであろうか。

メルロー＝ポンティは感覚するものと感覚されるものとを志向的な関係として捉える。「感覚するものと感覚されるものは二つの外面的な項として対面してはならず、また感覚は感覚するものの中への感覚されるものの侵入ではない」(PP 247-248)。感覚するものと感覚されるものとの志向的な関係は「対比 *s'accoupler*」(PP 248, 370)の現象として了解される。我々は対化の現象を明らかにしなければならぬ。この現象に身体の運動志向性が関わっているのである。先に身体の運動志向性において身体空間が構成されることが示された。しかし身体の運動志向性が構成するのは身体空間だけではない。

別の精神盲の患者は扉をノックすることはできるが、その扉が隠されているとか、単にその扉が手の届くところになんというだけで、この患者はもはやノックできなくなる。扉が手の届くところにならない場合、目を開け扉に目を固定していてもさへも、患者は虚空に向かって扉を叩いたり開けたりする仕草を行うことができない<sup>(21)</sup>。しかしこの患者は扉を扉として知覚し、手の届くところがあれば扉をノックするのであるから、視覚の欠損はここでは問題とはなっていない。一見、潜在的な接触の場の崩壊と思えるような現象が起こっている。

この患者の症例は、身体の運動志向性が、身体のある部位を予料するだけでなく、身体空間を越えて、外的空間へと食い込んでいることを示すだろう。感覚されるものを予料する身体は外的空間を構成している。身体の運動志向性は作動しつつある志向性の別の名でしかない。正常な被験者(あるいは習慣的な動作を行う場合の精神盲の患者)においては、感覚されるものの「一種の距離を置いた引力 *une sorte d'attraction à distance*」(PP 124)は、身体を「世界のしかじかの領域に対する能力 *puissance de telles et telles régions du monde*」(PP 123)として引きつけるということができよう。



この患者は、扉が身体との接触を保つかぎりにおいては、つまり身体の運動志向性によって構成される身体空間においては、自己の身体を力として経験し、ノックという行為を遂行する。身体空間を越えたところで、患者は行為の不全に陥っている。潜在的な接触の場の崩壊かと思われたものは、実は身体空間と外的空間との関係として問題化される必要があろう。患者においては、身体の運動志向性は、外的空間を構成する際に、弛緩する。感覚するものと感覚されるものとの対化の現象は、身体空間と外的空間との関係へと転化されるのである。

感覚するものと感覚されるものとの対化の現象は、したがって、身体空間と外的空間との同調と考えられねばならぬであろう。身体の運動志向性は身体空間と外的空間を貫くのである。メルロー・ポンティは「感覚の主体は、一種の実存の場にその場とともに生まれ *co-naître*、その場と同調する *se synchroniser* という一つの力である」(PP 245)と表現する。もちろん外的空間においても、自己の身体は力として捉えられていなければならない。そうであるからこそ正常な被験者は虚空で扉を叩く仕草をすることができるのである。身体の運動志向性が設らえる身体空間及び外的空間において、自己の身体は力として統覚されている。自己の身体が、身体空間であっても外的空間であっても、図と地の構造において明示されることのない第三項であるのは、こうした事情によるのである。

我々は、先に身体空間を検討した際の結論をここで補完しなければならないだろう。身体の運動志向性は、単に身体空間としての身体の構えであるだけでなく、対象への「開口 *ouverture*」(PP 113, 136)であり、世界に対する構えなのだ。「私の身体の一つ一つの構えは、直ちに私にとってはある光景に対する能力であり、一つ一つの光景は私にとっては、それが運動感覚的な *kinesthésique* 状況においてあるところのものである」(PP 349)。身体図式は、身体の運動志向性が貫く身体空間と外的空間において、明示されることなく自己の身体が力として統覚されている事態を表

明するのである。

そこでメルロー・ポンティは、感覚する主体の匿名性あるいは無記名性を導入する。「感覚を経験する度ごとに、私は感覚が(…)すでに世界に加担し、その諸局面のいくつかに開かれ、それらと同調していたもう一つの我と係わるのを体験するのである」(PP 250)。感覚する主体は、いわば専門化された自然的な我、すなわち見る私、聞く私、触れる私である。こうした自然的な私は、自己の身体が力として統覚されていることを前提とする。この統覚は、感覚するものと感覚されるものとの間の「原初的な獲得物の厚み」(PP 250)である。「もし知覚的経験を正確に表現しようとするならば、私はひとが私において知覚すると言うべきであって、私が知覚すると言ってはならないのである」(PP 249)。

以上からメルロー・ポンティの身体概念は明らかに変わったであろう。身体図式の理論によって我々は現象野における現象的身体を感じることを学び直したのである。<sup>(23)</sup>そして「身体図式は単に私の身体の経験だけではなく、さらに世界の中における私の身体の経験でもある」(PP 165)。自己の身体は、世界そのものへと向かう身体の運動志向性において力として現れる。私による私の身体の経験は、世界内存在の超越の運動の力の経験であるのだ。また現象的身体を見いだした際我々が言及した眼差す者と眼差されるものとの特異な関係も、ここにおいて了解されたことであろう。

### 超越論的領野としての身体

最後に、我々は先送りにされた問題についての見通しを開いておかねばなるまい。私による私の身体の経験が私による私の経験であるのは、身体の運動志向性において現実態となる力の統覚が自己意識であることによる。ところでこの

力は行動という時間現象となって発現するのに対し、力の統覚としての自己意識は時間現象とはならない。仮にこの自己意識が力を構成することによって、時間現象となるならば、今度はそれを構成する作用についての意識が必要となり、自己意識は無限に回送されることになろう。力の統覚である自己意識は、何ものも構成しない。それゆえに自己意識は現象野の手前の超越論的領野に留まるのである。メルロー・ポンティが示唆していたように、超越論的領野への展望が開かれねばならないのである。

ところで「我々の身体は空間の中にあるとか、さらに時間の中にあるとか言ってはならない。身体は空間と時間に住まう（取り憑く）のである」（PP 162）。メルロー・ポンティが「住まう（取り憑く）」と言うのは、もちろん身体が超越の運動そのものになっていることを考慮してのことであろう。私による私の身体の経験が、身体の運動志向性において現実態となっている力の経験であるからこそ、「身体は必然的に〈ここ〉にあり、同時に必然的に〈いま〉存在する」（PP 163）のである。

しかしこれは身体の永遠化を意味しない。世界へと向かう身体の超越の運動は、その運動そのものによって、運動の全過程にわたって揺るがされている。したがって私による私の身体の経験である力の統覚は絶えず更新されており、自己意識は、超越の運動の全幅において、統一を実現していなければならない。

さらに、感覚するものと感覚されるものとの対化の現象、身体空間と外的空間との同調は、身体による世界の空間化であり時間化である。身体は、絶対的な〈ここ〉と〈いま〉とを分泌する。身体は空間と時間に取り憑き、「それらに貼りつく」（PP 164）のである。

我々が超越論的であるとみなす領野は、身体が分泌する〈ここ〉と〈いま〉の裏面でしかないであろう。力の統覚で

ある自己意識はそこに隠れているのである。それは時間現象とはならない。自己意識は、時間現象の観点から見れば、一種の欠如態であり、時間からはいつも逃れ去るのである。

我々は『知覚の現象学』における身体概念を分析することによって、私による私の身体の経験が、身体の運動志向性において現実態となっている力の経験であり、メルロー・ポンティによってこの力の統覚が自己意識とみなされていることを明らかにした。主観性の問題は、コーギトの検討において、メルロー・ポンティによって自覚的に取り上げ直される。実のところ身体概念はコーギトに直結していたのである。コーギトは身体に結び直されねばならない。「へ我思う、我在り」という命題において、二つの断言は全くの等価であり、そうでなければコーギトは存在しないであろう」(PP 438)とメルロー・ポンティが語るとき、思惟実体としての精神の存在が問題となっていないのではなく、コーギトとともに、私の身体の存在こそが問題化されているのである。メルロー・ポンティは、コーギトの検討において、私による私の身体の経験が私による私の経験であることを果たしてうまく示すことができたであろうか。我々はメルロー・ポンティのコーギトをこの観点から改めて検討し直さねばならないのである。

## 註

*Phénoménologie de la perception*, Editions Gallimard, Paris, 1945. からの引用、参照箇所は略記号 PP の後に頁数を並記する。  
 メルロー・ポンティ。

(1) Voir aussi PP 231.

(2) PP 68.

(3) PP 81.

- (4) PP 82.
- (5) Voir aussi PP 82. 「潜在的に諸事物の中に身を置くことによって、私はすでに様々の角度から私の現在の視覚の中心となつてゐる対象を捉え apercevoir してゐるのである。」
- (6) 眼差されている対象が他の対象を隠すということと隠された対象が見る者に対して己を開いていることは、同じ事態の異なる表現に過ぎない。
- (7) PP XIII, 141, 478, 490.
- (8) 私の身体が他の対象から区別されるための特徴として、メルロー・ポンティはほかに身体の「二重感覚 sensations doubles」及び身体が「情感的対象 objet affectif」であることを挙げべてゐる (Voir PP 109-110)。
- (9) メルロー・ポンティは一方で確かに「現象的身体とは何か」に答えようとしてゐる。その際現象的身体は外から見られたかぎりでの規定を持つ。例えば「現象的身体は、自らの周囲に一つの環境を投企するかぎりでの身体、その〈諸部分〉がたがいをダイナミックに知り合い、またその受容器がそれらの共働作用によって対象の知覚を可能にするように配置されているかぎりでの身体である」(PP 269) という。現象的身体のこうした規定には「器官としての身体 corps organique」の性格が強く、現象的身体が本来持つてゐる性格を捉え損なう恐れがある。それゆえ我々は「現象的身体が如何に現れるのか」という観点で立つのである。
- (10) 感覚体側転倒という症状をさす。『知覚の現象学』I (みすず書房) の訳註 (三四〇頁) を参照。
- (11) PP 120.
- (12) PP 121.
- (13) *Ibid.*
- (14) PP 124.
- (15) PP 126.
- (16) Cf. PP 124.
- (17) この用語は、マッサールの『イデー』IIからの援用である。それは『シニニ』(Signes, Editions Gallimard, 1960. p. 210) または『見えるものと見えないもの』及びそれに付された研究ノート (Le Visible et l'Invisible, Editions Gallimard,

1964.) 2) 8) について散見される。

- (8) PP 241.
- (6) PP 242.
- (20) PP 244.
- (21) PP 136.
- (22) PP 250.
- (23) PP 239.

(博士課程学生)